

家族のためのわかりやすい統合失調症講座 ～薬について～

6月号

6月に入り暑さが日ごとに増しておりますがいかがお過ごしでしょうか。鴻巣病院では、統合失調症家族教室を定期的で開催していますが、感染症予防の観点から2021年前期の開催を見送る運びとなりました。

そこで家族教室でお話しする内容をおたよりの形でお伝えしていくことになりました。今回は薬についてお話をしていきます。



前回の「家族のためのわかりやすい統合失調症講座～病気編」の中で、統合失調症についてすべてが解明されているわけではないが、脳の中で情報をうまく処理できていないことが一因となっているらしい、ということが書かれていました。では脳の中で情報はどう伝わるのでしょうか？神経細胞の内部では電気的な信号、そして神経細胞と神経細胞の間では「神経伝達物質」というものがその役目を担っています。そして、統合失調症の患者さんの脳の中ではこの「神経伝達物質」が大きくバランスを崩しているらしい、と考えられています。ある部分では多く出過ぎて幻覚・妄想などの症状を引き起こし、ある部分では枯渇して意欲・関心の低下を引き起こしてしまいます。これを治療する「抗精神病薬」というグループはこのバランスを是正して様々な症状を軽減していこうという薬です。1950年代に原型となる薬が開発され（第一世代）、その後いくつかの改良が施されました（第二世代）。また長時間効果が持続する（2週間～4週間タイプが通常使われていますが最近3か月タイプのものが登場してきました）持効性注射剤（LAI）というものも開発され、多くの患者さんが使用しています。ほぼすべての薬に共通している効果発現の仕組みは、受容体（レセプター）という部分に結合することで、そこを遮断したり、または刺激を加えたりするというものです。大事なのはこの結合は一時的なものなので、効果を確実なものとするには服薬の継続が必要となってくることです。

これはよく言われることですが、患者さん本人の服薬に対し、家族が適切に関わることで再発の可能性をより下げることが出来ます。病気の治療、それに伴う服薬は長期戦となります。これに対し「きちんと服薬すること」の一言では足りないような気がします。薬の効果とその限界、副作用の内容とその対処法などをきちんと理解し、本人の期待と不安に寄り添ってともに闘い続けていく姿勢が大事だと思います。

症状には個人差があります。ご質問などあれば、病棟スタッフ、もしくはデイケアまでお気軽にお声かけ下さい。次回は「対応について」を予定しています。